

[平成 26 年度 奨励賞]

アジア系移民が建立した宗教施設とコミュニティ創造 ―地域において宗教施設全体に求められるもの―

荒谷 弘之

序章

第 1 章 背景知識

1. 1 日本におけるアジア系移民の特徴
1. 2 アジアにおける宗教の特徴

第 2 章 事例調査

2. 1 宗教法人タイ国タンマガーイ寺院 大阪別院
2. 2 南和寺（ベトナム仏教）
2. 3 在日大韓基督教 大阪別院
2. 4 大阪マスジッド

第 3 章 考察

3. 1 移民のための宗教施設だからできること
3. 2 日本における宗教施設存在の難しさ
3. 3 宗教施設が地域コミュニティに求められるものとは

終章

序章

日本は、全人口の大多数を同一民族の割合を大きく占める国である。多くの国民が生まれた時は神社で祝い、結婚式はキリスト式で、死ぬ時は仏教式の葬式を行うといった人生を受け入れており、信仰に対して極めて寛大な国である。その背景には、日本国憲法第 20 条の信教の自由と政教分離原則がある事と、日常生活において宗教観を意識することが少ない事が挙げられる。一方、外国から日本にきた移民の中には、それぞれの宗教を厚く信仰し、毎日もしくは毎週のようにお祈りを捧げる人も多い。そのため、彼らが日本で暮らす場合は、日本人との宗教観の違いを感じる人が多いと思われる。特に、彼らが心のより所として、自身の宗教に関する場所を日本に設ける場合は、周辺住民との関係が問題となる。

そこで、私は多様な移民集団の宗教施設を実際に訪れ、それらが移民コミュニティにとってどのような存在であり、また役割を果たせるかについて検討を行った。

本論文は 3 章からなっている。

第 1 章では、日本のアジアからの外国人移民の受け入れ状況を述べるとともに、今後の見

通しを示す。また、宗教を簡単な概略という形で述べる。

第2章では、関西地区においてアジア系移民が建立した宗教施設を訪問し、それぞれの宗教施設と様々なコミュニティとの関わりについて調査を行った内容を述べる。

第3章では、日本における宗教受容のあり方と宗教施設にできる地域との関わり方を考えて、宗教施設全体の方向性を述べる。

第1章 背景知識

1.1 日本におけるアジア系移民の特徴

日本は第二次大戦前まで移民送出国であったものの（駒井 2006:19）、例えば1910年の朝鮮併合にとまって多くの韓国・朝鮮人が来訪するなど、多様な移民が流入してきた。

また、比較的新しい流入もあり、近年では外国人は大幅に増え続けている。表1「在留外国人総数（2014）」は、法務省入国管理局による2014年6月データの時計を示している。在留外国人の総数は2,086,603人で、この内アジアでは全体の約81%をしめる1,697,800人が在住している。順位づけは、韓国、フィリピン、ベトナムの順である。ただし、中国、韓国・朝鮮で総数の半分以上を占める。宗教的には、韓国・朝鮮、中国などの東アジアやベトナム、タイなどの仏教圏から外国人が多く来ているが、イスラーム圏からの移民も多い。例えば、インドネシア（28,649人）、パキスタン（11,481人）、バングラデシュ（9,096人）といった形である。1989年は3カ国とも2,000人前後であり大幅な増加である（三木・櫻井 2012:17）。過去には、1975年の南北ベトナム合併以降、インドシナ3国（ベトナム・ラオス・カンボジア）からの難民が日本にやってきてから、難民条約・議定書を発効した経緯¹もあり、アジアからの移民は日本にとって最重要とも言える。

そして、今後も在留外国人の増加が見込まれる。今年の2月に政府は外国からの移民を毎年20万人受け入れ、出生率も回復すれば100年後も人口は1億人超を保つことができるという試算を発表²し話題となった。また、高度人材ポイント制によって、優秀な人材をより多く集めるための出入国の優遇制度を行っている³。こうした中、公益財団法人日本国際交流センターも「アジア青年受け入れ事業」と題した、北海道滝川市において外国人の規制を狭めてフィリピン人の青年を受け入れる経済特区を政府に申請を検討している⁴。2020年には東京オリンピック開催を控える今、まさに在留外国人へのサポートが必要とされている。

¹ 外務省「難民 難民問題と日本Ⅲ一国内における難民の受け入れ」2014年12月2日最終アクセス。
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/nanmin/main3.html>

² 朝日新聞 デジタル「『日本の人口移民で1億人維持可能』政府、本格議論へ」2014年12月2日最終アクセス。
<http://www.asahi.com/articles/ASG2S5GVNG2SULFA01N.html>

³ 法務省 入国管理局「高度人材ポイント制による出入国管理上の優遇制度」2014年12月2日最終アクセス。
http://www.immi-moj.go.jp/newimmiaact_3/

⁴ 総理官邸「国家戦略特区ワーキンググループ提案に関するヒアリング」（議事概要）2014年12月2日最終アクセス。http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/kokusentoc_wg/pdf/62_250919_nihonkokusai.pdf

表1 在留外国人総数（2014）

世界全体	2,086,603
アジア全体	1,697,800
中国	648,734
韓国・朝鮮	508,561
フィリピン	213,923
ベトナム	85,499
タイ	42,270
台湾	36,965
ネパール	36,107
インドネシア	28,649
インド	23,411
パキスタン	11,481
ミャンマー	9,231
バングラデシュ	9,096

出典 「法務省 在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表」
 国籍・地域別 在留資格（在留目的）別 在留外国人（2014年6月末）

1.2 アジアにおける宗教の特徴

アジアでの宗教観は、主にキリスト教が信仰されている北南アメリカやヨーロッパとは異なり様々であると言える。表2「アジア各国における宗教人口の概況」では、タイ、インドネシア、フィリピンなど特定の宗教を信仰する人が8割～9割を占める国が多く見られる。日本のデータも文化庁編「宗教年鑑」平成24年度版などに掲載されている。しかし、対象となる総数は日本の人口を超えており、割合では求められないものとなっているため省略する。日本における宗教の特徴については第3章3.1で詳しく取り上げる。ここでは、西アジア、中央アジアについては省略し、東アジア・東南アジア・南アジアの宗教事情について紹介する。

まず東アジアを見る。韓国では、キリスト教が主に信仰されているが、仏教寺院も多く存在し、観光客にお寺での生活を体験してもらうテンプルステイを国家が促進している。中国では儒教や道教などが信仰されるが、社会主義国家として国家を侮辱するような宗教活動は固く禁じている。

次に東南アジア諸国連合（ASEAN）を見る。キリスト教信者が多数を占めるフィリピンを除き、タイ・ラオスなどの仏教国とマレーシア・インドネシアなどのイスラーム国家に分かれ、ASEAN人口の42%がイスラーム、40%が仏教の信仰を持つと言われている。マレーシアではイスラーム教を国教とし、各地域に公立のモスクを持つが、仏教寺院に対して建設時などに一定の助成金を行っている。一方、ASEANで唯一の北伝仏教が信仰されているベトナムの仏教信仰率は全人口の10%に過ぎない。このように仏教国・イスラーム国家といえども、それは大まかな基準であり、全体を捉えることは容易ではない。

南アジアでは、仏教発祥の国であるインドはヒンドゥー教の信者が多く居住し、シク教・ジャイナ教など多様な宗教が存在する。パキスタン・バングラデシュ・モルティブは、イスラーム国家である。スリランカ・ネパール・ブータンではインドから伝わった仏教の教えが根強く残り、今でも国家の大切な要である。

表2 アジア各国における宗教人口の概況

	仏教	イスラーム	ヒンドゥー教	キリスト教	その他
韓国(2005)				29.2	
台湾(2012)				2.5	
タイ(2010)	93.6	4.9	0.1	1.2	0.2
ベトナム(2009)	9.3	0.1		7.2	83.4
インドネシア(2000)	0.8	88.2	1.8	8.9	0.2
フィリピン(2000)	0.1	5.1		92.6	2.2
インド(2001)	0.8	13.4	80.5	2.3	3
ネパール(2011)	10.7	4.2	80.6	0.4	4
パキスタン(1998)		96.3	1.6	1.6	0.5
バングラデシュ(2009)	0.6	89.6	9.3	0.3	0.2

出典 文化庁文化政策課

「在留外国人の宗教事情に関する資料集—東アジア・南アメリカ編—（2014: ix）」

「在留外国人の宗教事情に関する資料集—東南アジア・南アジア編—（2013: ix）」

第2章 事例調査

このようにアジアには様々な宗教が存在し、日本にはたくさんの在留外国人が住む。しかし、彼らにはそれぞれの信仰があり、その思いは日本の宗教施設だけでは対応できないことも多い。そのため自ら立ち上げた宗教施設が多数存在している。ここでは関西地区にある4つの施設を取り上げ、彼らの思いと向き合おうと試みた。

また、周囲の様々なコミュニティに軸を置き、取材した内容と一部文献からの資料を基に以下の5つの点から記述する。

- a) 地域背景と建てられた経緯 b) 日々の活動 c) 地域社会との交流と摩擦
- d) エスニック社会の創造 e) 母国の人達との交流

2.1 宗教法人タイ国タンマガーイ寺院 大阪別院

2014年7月24日(木)に現地を訪問し、スハキ・キッティコ僧侶にお話を伺った。以下、出典表記のない記述はすべて筆者のインタビューによる。

a) 地域背景と建てられた経緯

現在、日本に10もの別院をもつタンマガーイ寺院は1970年にタイに建てられたお寺で、1992年以降海外での布教を開始した。日本に設立されたのはタンマガーイ寺院総本山の大師の遺言、および世界平和のために海外にタイ上座部仏教を布教するという現住職の意思に基づいてのことで、2000年4月に大阪別院が設立された（三木・櫻井 2012:171-172）。タイ仏教の新宗教のような形となっているが、在日タイ大使館では、HPでタンマガーイ寺院の事が紹介されている⁵。

⁵ 在東京タイ王国大使館「日本にあるタイのお寺」2014年12月2日最終アクセス。

http://www.thaiembassy.jp/rtel/index.php?option=com_content&view=category&id=59&Itemid=241

b) 日々の活動

大阪別院に僧侶は5人在籍している。これは全国で2番目の規模を誇る。活動は瞑想が主であり、説法も同時に行う。例えば、子供達に両親を、寝るときは自分の両親に参拝してから寝なさいと指導している。これはいつも育ててくれている両親を家でのお坊さんとして敬いなさいとの考えからである。上座部仏教なので、通常お寺ではお葬式はしないが、信者から頼まれた場合は、僧侶が自宅に向かいお経を唱えている。また、毎月1回托鉢も行っている。戒律はとても厳しく、禁止行為が多く存在する。また特別な行事、例えばタイ政府関連の行事などでは、宗派に関係なく日本国内のタイ寺院に所属する僧侶たちが招請される（三木・櫻井 2012:174）

c) 地域社会との交流と摩擦

大阪寺院では自主的に周辺の清掃活動を行っている。寺院のスタッフは、地域の子供会や消防訓練に参加し、区役所でタイ人の主に日本語のサポートを行う時もある。

ただし、僧侶は戒律のためなかなか参加しにくい。例として、地域の運動会では、職員が参加しているが僧侶はむやみに走ってはならないという戒律のため参加できない。僧侶と近所の人はたまに挨拶なども交わすが、それ以外に住民との地域交流はない。例外として、数年前、地域の小学校のPTAに呼ばれて、職員と共にタイの文化の講演を行った。周りの日本のお寺との交流も無い。スハキ僧侶は、座禅などの布教活動であれば、是非日本のお寺と一緒に行いたいと回答している。

d) エスニック社会の創造

タイでは元々子供の頃から日々の習慣としてお寺に通っているのも、大阪別院に訪れる人は多い。宗派は特に気にしていないという。お寺に参拝に来る人は、在日タイ人の女性や年配の方が多く、男性は少ない。また、在日タイ人と結婚した日本人女性も来るが、僧侶に喜捨するという考えに戸惑う人も少なくない。

e) 母国の人達との交流

数年ごとに母国の僧侶の入れ替えがある。もう1度日本に行きたいと希望する人も多く、日本へ再来日して赴任することも多い。

2.2 南和寺（ベトナム仏教）

2014年7月24日（木）に現地を訪問し、サポーターの2人にお話を伺った。以下、出典表記のない記述はすべて筆者のインタビューによる。

a) 地域背景と建てられた経緯

神戸市長田区は2014年11月1日現在⁶、全人口98,347人。在留外国人の数は7087人（2013年）⁷で、全国の自治体でも55番目にあたる⁸。神戸在住のベトナム人は600人である。信仰

⁶ 神戸市 「毎月推計人口」 2014年12月2日最終アクセス。

<http://www.city.kobe.lg.jp/information/data/statistics/toukei/jinkou/suikeijinkou.html>

は仏教とキリスト教に分かれており、その数はほぼ同じである。特に長田区内では、靴産業に就くベトナム人が多いことから、集住地区がある。彼らの多くは低賃金労働者であると考えられる。

住職は、当初漢訳仏典からの重訳で中身に問題の多いベトナム仏典を、サンスクリット語原典とつきあわせて校訂する研究に打ち込むつもりだったが、日本で育ってベトナム語やベトナム文化を身につけられない子供たち、日本で死んだら霊魂はどこに行くのかと心配する年配の人たち、そういう人たちの助けになればとお寺の世話を引き受けたとのことである⁹。

b) 日々の活動

寺院の運営は住職1人とサポーター2人で行っている。住職は留学生、サポーター2人は難民として日本にやってきた。僧侶は寺院内で生活、サポーターは午前中普通に働き、午後は寺院の手伝いをしている。毎日19時30分～20時30分までは一般の人が参加できるお参りをを行い、般若心経などを唱えている。

c) 地域社会との交流と摩擦

この寺院を建設した当初、言葉の違いでの偏見やうるさいとの苦情もあったが、とても良い自治会長に巡り会えたおかげで救われたという。その人は、「ベトナム人の方がお寺を建てられますのでよろしくお願いします」と一緒に周辺地域を回ってくれた。今では地域社会に溶けこみ、近所の人で訪ねてくれる人もいる。また、1年に1度の旧正月のイベントの際には、たくさんの人が訪れるため、事前に周辺住民に石鹸やお菓子のおすそ分けをして理解を求めている。

d) エスニック社会の創造

夜のお参りでは、平日は10数人、土曜・日曜は20～30人の人が訪れ、毎年お盆の時期は200人ほどが訪れる。訪れる人は、神戸市内に住むベトナム2世をはじめ、インターネットで知り、県外からも仏教を研究している大学教授、日本語の先生をしているお坊さん、旧正月に毎年三重県から来るご夫婦（旦那さん…日本人、奥さん…ベトナム人）などである。

さらに、日本の学校に通っている2世がここに来て母国の文化を学びに来ていて、その子の学校の先生も生徒の母国の環境を知るために勉強しに来る。

また、留学生が子供たちにベトナム語を教えていて、もしできたらクラスも作りたいという思いがある。

e) 母国の人達との交流

母国の人との交流はない。またベトナム政府とも関係はない。

⁷ 法務省「在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表」〈2014年6月末〉

2014年12月2日最終アクセス。http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001127507

⁸ 同上。

⁹ ダオ・チーランのブログ・パシフィック「神戸のイスラム寺院訪問」2014年12月2日最終アクセス。
http://daiviet.blog55.fc2.com/blog-date-201306.html

2.3 在日大韓基督教 大阪別院

2014年6月12日(木)に現地を訪問し、教会のスタッフにお話を伺った。

a) 地域背景と建てられた経緯

大阪市生野区は2014年11月1日現在¹⁰、全人口129,489人で、外国人登録人口は27,995人で、全人口の約5分の1を占める25,499人が韓国・朝鮮系である。また、生野区は外国人登録人口が、大阪市内で1番多い区でもある。

教団法人在日大韓基督教〈プロテスタント〉は1908年に発足した。大阪別院は1921年に岸和田の紡績工場で働いていた2人の女性が、日本でも朝鮮語で礼拝をしたいと当時神戸に留学していた男性に頼んで、プール学院高校の1室を借りて始まったのがきっかけである。

鶴橋駅の近くには、この教会以外に韓国系協会がカトリック生野教会や聖公会生野センターの2か所ある。韓国キリスト教会は海外に多くの宣教師を送り出しており、アメリカに次ぐ第2位であると言われている。

b) 日々の活動

表3「在日大韓基督教 大阪教会 礼拝案内」は教会のスケジュールを示している。毎朝6時から牧師3人でローテーションを組んで早天祈祷会を行い、日曜日の午前と午後の礼拝、水曜日の夜の水曜祈祷会のほか、金曜日には聖書の勉強会を行っている。

c) 地域社会との交流と摩擦

約30年前、現在の教会の建物を建てるときに募金をしてくれたアメリカとドイツの人から地域社会に溶け込めるような施設にしてほしいと頼まれたため、教会の隣に幼稚園がつくられた。幼稚園は教会とは別という考えの元で営まれている。

また、毎週火曜日10時～14時にかけて、地域の年配の方(国籍・宗教不問)を招待し、昼食と生涯教育の「大阪協会老人大学」サービスを1回200円で提供している。生涯教育は、韓国語初級・中級班、日本語初級・中級班、英語初級・中級班、美術班等の学科を自由に選択し、2年間の授業で継続的な勉強である¹¹。食費は経費の半分を大阪市生野区の補助金でまかなっている。

さらに、地域住民で望まれる方には、礼拝堂内部の場所の貸出しを行っている。ここは本来であれば聖域として考えられていて信者以外は立ち入れない場所でもある。

¹⁰ 大阪市生野区「生野区の統計」2014年12月2日最終アクセス。

<http://www.city.osaka.lg.jp/ikuno/page/0000000434.html>

¹¹ 老人大学－在日大韓基督教 大阪教会 2014年12月2日最終アクセス

<http://www.osakachurch.or.jp/ja/old-man/>

表3 在日大韓基督教 大阪教会 礼拝案内

日曜日	9:40～	日本語礼拝
	11:00～	韓国語礼拝(日本語通訳あり)
	14:00～	午後礼拝(献身・讃揚)
	11:00～	教会学校(幼児部、幼少科、中高科)
水曜日	19:00～	水曜祈祷会
毎日	6:00～	早天祈祷会
火曜日	11:00～	老人大学

出典 在日大韓基督教 大阪教会 2014年6月8日(第23週)リーフレット

d) エスニック社会の創造

子供向けクリスマス会やキャンプなどを主催している。このうちクリスマス会については他宗教の子供も参加している。周辺のカトリック生野教会や聖公会生野センターとの交流はあまりないが、1年に1回近隣の韓国系教会の聖職者が共同で教会の巡礼を行う。

e) 母国の人達との交流

大阪別院が建立された当初は、宣教師が本国からやってきて礼拝をしていた。今でも本国から来て礼拝をやる時もたまにある。

2.4 大阪マスジッド

2014年6月12日(木)に現地を訪問し、12月19日(金)に再訪問を行った。再訪問時には、現在、大阪マスジッドの近くでインドネシア人と同居している大学2回生で日本人ムスリムのユースフ・ムハンマドさんにお話を伺った。

a) 地域背景と建てられた経緯

2001年、中古車ビジネスに携わるスリランカ出身のムスリムたちを中心に公団住宅の1室をモスクにしたのがはじまり、2005年にスリランカ人ムスリムの4階建て自宅の2階にへ移転、その頃から大阪モスクと呼ばれるようになる。2010年、現在の場所にモスク専用の建物が確保された(三木・櫻井2012:231)。イスラームの教義によればムスリムが30家族いたらムッサラやモスクをつくる必要があるとされている(駒井2006:148)。こちらは、ニューカマーのムスリムが中心となっていると考えられる。ニューカマーとは、1980年代後半に労働者として来日し、定住した外国人のことである(樋口:57)。

b) 日々の活動

イスラーム教徒は、アラビア語のクルアーンとハーディスに基づき、1日5回の礼拝を行う。ユースフさんによると、礼拝は義務としては5回だが、任意であるものを含めれば17回にも及ぶと述べている。毎月末にイスラーム教の正しい教えを伝えるために、大阪マスジッドの数人が名古屋モスクへ行く。

c) 地域社会との交流と摩擦

非常に落ち着いた関係にあり、むしろムスリムたちの礼儀正しさに感心しているという声が聞かれる（三木・櫻井 2012:232）。モスク開設にあたって事前の挨拶をきちんと行うなど周知な準備を行い、モスク開堂後も町会費を滞りなく支払い、地元の神社の挨拶祭礼に際してご祝儀を包むなど、地域に受け入れられるための努力を怠っていない（三木・櫻井 2012:232）。ただし、ユースフさんによると、ご祝儀は現在無くなり、地域との交流は挨拶レベルであるとされる。イスラーム教は同じ信仰をもつウンマ同士の結びつきが強いため、地域社会との接点は少ない。ただ、社会貢献活動としてホームレスへの支援を行っている。これは教義の中で、困っている人がいたら助けるようにという教えからでもあるそうだ。

d) エスニック社会の創造

モスクを設立した人はスリランカ人であったが、現在はパキスタンとインドネシアの人が中心にマスジッドを訪れ、教会にはインドネシアの人が常在している。マスジッドのビルの2階と3階は礼拝スペースであり、1階ではハラールフードを売っている。近くには、ハラールレストランが2軒ある。

6月に訪問した際は、教会訪問後このレストランを訪れた。私が14時～15時ごろに食べている間、ハラールフードショップの人や他のパキスタン人も集まって、大阪弁とパキスタンの言葉で楽しくお話をする光景が見られた。

12月に訪問した際は、金曜礼拝を見学させてもらった。イスラーム教では挨拶が重視されており、多くのムスリムが挨拶のやりとりをしているのを見た。さらに、見知らぬ私にも気さくに声をかけてくれた。ムスリムはみな兄弟であるという考えのもとで、礼拝開始前から積極的な交流が見られた。19時15分の礼拝があり、40分ほどで終わると、コーランの簡単な講習がアラビア語と英語の2言語で開催され、一部の人が残った。その間、私はコースフさんと共に話していた。そして、2Fと3Fで分かれていた男女共にパキスタン料理店へと向かった。料理店ではイスラーム教の慣習により男女で場所が分かれる。ここでは先ほど礼拝をしていた人の半分以上が集まり、私も夕食をごちそうになったが、その間、信者は一般の外食料理店で行うと問題になるほどのうるささであった。もちろん彼らは酒を飲んでいない。ここで出会った人によると、インドネシア人よりパキスタン人の方がうるさいとのことである。

e) 母国の人達との交流

母国の人との交流はない。

第3章 考察

3.1 移民のための宗教施設だからできること

現地調査から分かることは、それぞれの宗教施設が信者＝在日外国人またはその家族に対してのケアとしての機能を持っていることである。ベトナム仏教の南和寺を建てようとした住職の思いにそれがよく表れていて、日本の宗教では不十分な個人の気持ちを宗教の信仰を通じて満たされる効果をもつ。また、大阪マスジッドのように礼拝終了後は仲間たちとの

交流の場としての側面がある場合が多く、宗教施設に集まる人達にとっては、情報交換を通じて自分が置かれている状況をより理解でき、心のいやしとなるだろう。

しかし、この場所で作られるコミュニティ（宗教コミュニティ）には違いが見られる。キリスト教会では、在日大韓基督教 大阪別院にも見られるように日曜日に礼拝と共に子供向けの日曜学校を設け、家族で教会に訪れ聖書の教えを学べるような形であり、家族ぐるみで交流する事ができると思われる。仏教寺院では、上座部仏教であるタイ国タンマガーイ寺院と大乘仏教の南和寺で内部の雰囲気の違いは見られたが、特に決まったイベントはなく、毎日のお参りをやっていますので来たい人は来てくださいという形であり、家族全員が訪れるとは限らない。イスラーム寺院では、金曜日はムスリムの義務としての集団礼拝としてマスジッドに集まる。元々ムスリム同士はみな兄弟として接するという教えのもとで集まり、結束力が強くコミュニティは和気あいあいとした形である。礼拝や食事の際でも、男女間はしっかりと区別されている。もちろんだのコミュニティが良い・悪いといった区別はできないが、宗教施設内部で人との接し方はそれぞれ異なると考えられる。

一方、宗教ではなく祖国の文化紹介するイベントを開催、あるいは文化センターを設けている事例も見られる。例えば、南和寺では日本の学校に通っているベトナム 2 世やベトナム文化に興味を持った近所の人がベトナムの文化を学びに来ている。また、トルコ文化センターを併設するイスラーム教寺院の東京ジャーミイは、トルコ人やその他ムスリムに宗教サービスを提供することを目的とし、日本人への積極的布教は考えていないとのことである（駒井 2006:146）ため、宗教に関わりないカルチャーセンターとしての機能を持った施設とも言える。もし在留外国人の宗教者が信者以外の地域住民にも愛される施設を目指していきたいのであれば、このような機能を持つことも必要であると思う。

3.2 日本における宗教施設存在の難しさ

ただし宗教コミュニティと地域コミュニティの差はなかなか埋めることが難しい。この背景としては、様々な理由がある。ここではその理由を述べる。

まず日本人は一神教を受け入れにくい。清水書院の倫理の教科書では『和辻哲郎は「風土」において、モンスーン型（インド）・砂漠型（アラビア・アフリカなど）・牧場型（ヨーロッパ）という三つの風土的類型を対比している。砂漠の過酷な自然のもとでは、世界に対する対抗的關係が、牧場の従順な自然のもとでは、支配的關係が成り立つという。また、モンスーン型のなかでも、台風と豪雪を特徴とする日本の類型は、台風の激情・戦闘的な力強さとしめやかな情緒・静かなあきらめの二重性格にあるとする。』との記述がある。また、遠藤周作の「沈黙」では、日本人は一信教の神を信仰できないという考え方（橋爪・島田 2002:18）が述べられている。これら先人の分析を背景とすると、八百万神を信じる日本人がイエスやアッラーを崇める人々の気持ちを理解するのは、容易いことではないことが分かる。さらに日本の公立学校では宗教教育が禁止されていて、多くの人にとって他宗教のことを学べるのは高校の「倫理」の教科である。だがそれも必修科目ではなく、理系の学生には触れる機会が少ないものとなっている現状を考えると、宗教をしっかりと学べる環境が整っているとはいえない。

宗教統計調査平成 25 年によると、日本における宗教団体の信者数は 1 億 9700 万人以上であり、日本の人口をはるかに超える。これは、神社神道では神社の近隣住民を氏子 = 信者と

して計算し、伝統仏教の寺院でも檀家である家庭の全員を檀家としてカウントするなどしているため、神社や寺院の信者であるという意識を持っていない数多くの人々も統計に含みこんでしまっているのである（高橋・塚田・岡本 2012:5-6）。神道が宗教であるかどうかは諸説あるが、いずれにせよ多くの日本人は1つの宗教を信仰するといった概念を強く持てない背景がある。

表4 全国社寺協会等宗教団体・信者数（2013年）

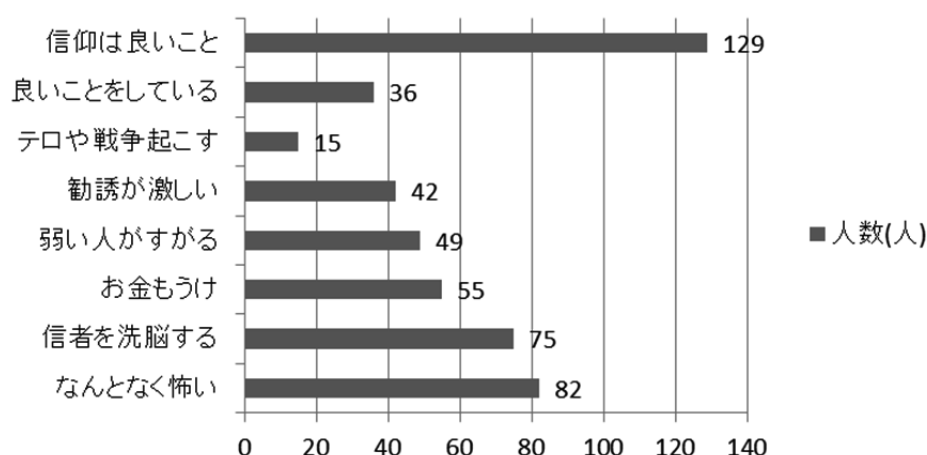
	宗教団体(宗教法人を含む)	信者
神道系	88,720	100,939,613
仏教系	85,238	85,138,694
キリスト教系	9,277	1,908,479
諸教	36,954	9,114,049
合計	220,189	197,100,835

出典 文部科学省 宗教統計調査 全国社寺教会等宗教団体・教師・信者数 平成25年

そして、これら寺社仏閣の収入源のメインとなっているのは主に他宗教弾圧が起点であったと考えられている。国民全員をどこかの寺に配属させる檀家制度を導入した（池上 2011:95）ことや、お盆の棚経は、隠れキリスタンを探すために始まったという説。さらに明治初期の一時期、氏子の誕生を神社に報告することが義務とされて、神社に初参りする風習が始まったと考えられる経緯があること（池上 2011:204）も残念な事実である。日本国家は他宗教を弾圧することで、自国にとって都合の良い信仰とその行為を推進した。そして、現在まで宗教者の生活の基盤としてきているのは皮肉にも既存のお寺と神社である。ただ最近、葬式を営む方法も散骨や直葬など様々な選択肢があり国内の人口減少も避けられない状況では、需要の拡大は見込むことができない。

この流れによって、多くの日本人は家族単位で菩提寺を持つようになり、既存宗教や神社は信者獲得を熱心にやらなくても良くなり安定した収入を得ることになった。よって、これ以降に日本できた新しい宗教は信者獲得を熱心に行わざるおえなくなってしまう、独自の道を歩くこととなった。一部にはブラジル人などの在日外国人信者獲得に意欲的な宗教も存在する。しかし、既にどこかのお寺の檀家である多くの日本人にはカルト宗教かそうでないかは関係なく、自分たちにとって未知の宗教の布教活動や存在に対してひややかな人が多い。例として、The Liberty Web が2011年10月～11月にかけて日本各地の街頭や個別訪問などで得た335人の回答では、新宗教という言葉に対して信者を洗脳する・なんとなく怖いなどの悪いイメージを持っている人が一定数存在している。

表5 「新宗教」のイメージは？



出典 The Library Web「新宗教 15 の疑問 - Part1 新宗教のイメージは？ 新宗教への疑問など」
2014 年 12 月 29 日最終アクセス http://the-liberty.com/article.php?item_id=3391

このため在留外国人のための宗教や施設のことをあまり良く思っていない人も多い。イスラーム教に関しては、早稲田大学多民族多世代社会研究所が福岡マスジッドの周辺住民 1000 人（20 歳～70 歳）に対して行ったアンケート調査¹²では、イスラーム教が怖い宗教であると思うと答えた人が 49%、親しみにくい宗教であると思えた人は 65% を占めた。そして、日本にイスラーム教が入ってくることに対してどちらでもないが約 65%、嫌だが約 22%、平和を重んじる宗教であると思えた人が約 22% のみしかいないという結果が出ている。アンケートの調査時点で福岡マスジッド設立から 5 年が経過しているが、周辺住民には全体として良く思われていない事が示されている。

また在留外国人向けの宗教施設自体の場合、多くの課題がある。平成 22 年度 愛知県多文化共生コミュニティ状況等調査¹³では、宗教施設の運営課題として、「活動資金が不足している」との回答がもっとも多かった。その他、宗教法人になることが難しい。若い人が教会に関心をもたない。日本人と外国人ともに外国語（相手の言葉）ができない。政府からのサポートが足りない等の意見がある。施設関係者へのインタビューでは、最初は「宗教」ということでカルト的な見方をされてしまうこともあり、人が集まらなかった。若い利用者が集まらない。多くの困っている人を助けたいと思うが、宗教法人であるため、なかなか積極的に表立った声を出せないとの意見も調査結果に掲載されている。よって、地域コミュニティの中で、目立った行動をしてしまうと住民を不安がらせてしまう宗教施設も存在するという見方もできるだろう。

そして、世論調査では戦後の日本人の信仰心は、戦後間もない時期をピークにして停滞している（三木 2014:193）特に顕著なのが、表 5 のように 40 代～70 代であり、親・祖父母世代である。既存の宗教団体にとって、親から子へと教えが引き継ぐことは大切なことであるが、大きな期待はできない。

¹² 早稲田大学多民族多世代社会研究所 滞日ムスリム調査 外国人住民との共生に関する意識調査」福岡市報告書（2013）imemgs.com

¹³ 平成 22 年度愛知県多文化共生コミュニティ状況等実態調査報告書 2014 年 12 月 29 日最終アクセス <http://www.pref.aichi.jp/cmsfiles/contents/0000042/42851/hokokusho.pdf>

表6 「宗教を信じるか？」 アンケート調査

	1963年	1973年	1983年	1993年	2003年	2013年
信じている	31%	25%	32%	33%	30%	28%
信じていない	69%	75%	68%	67%	70%	72%
20歳代	87%	90%	85%	81%	93%	87%
30歳代	80%	84%	79%	71%	78%	80%
40歳代	60%	73%	69%	73%	77%	80%
50歳代	57%	65%	61%	66%	69%	73%
60歳代	46%	53%	44%	52%	60%	69%
70歳代	42%	41%	45%	41%	49%	56%

出典 統計数理研究所 日本人の国民性調査 #3.1 宗教を信じるか（1963年～2013年）

信仰がなくなることによって引き起こされるのは、信仰深い人への無理解である。異文化理解という言葉があるが、自分の文化（信仰）を持っていない以上、他の文化の中で生活する人を理解できるようになることは無い。地域コミュニティは宗教コミュニティの受け皿である。信仰をしない人が多い地域コミュニティでは、宗教コミュニティの存在自体を偏見するという方向性にも発展しかねない。問題点として、地域コミュニティの誰かが先導者となって近づこうとした場合は、他宗教や他宗派の人から反感を受ける可能性もあり、なかなか難しい事が挙げられる。けれども南和寺の場合は、近所の挨拶回りを一緒に回ってくれる自治会長がいたおかげで、地域に溶け込むことができた。このように、地域コミュニティには在留外国人の宗教施設を受け入れる理解者が必要とされる。

宗教コミュニティと地域コミュニティの差は、北島三郎の「まつり」で「山の神 海の神 今年も本当にありがとう」と歌われるような八百万の神を敬い感謝をする考えを持つ日本人にとって一神教の宗教に対する理解が難しいことや、既に菩提寺があり宗教を先祖供養という意味でとらえている人が多く、宗教に対する理解が何となく形成され、カルト問題を恐れて自分が知らない新しい宗教に対して勉強をせずに偏見の目で見てしまうと捉えられる。そして現在、中高年層の信仰離れが起き、今まで檀家から安定した収入を得てきた日本の伝統宗教も危惧している。しかし、葬式を営む方法も散骨や直葬など様々な選択肢があり国内の人口減少も避けられない状況では、需要の拡大は見込むことができない。一方、在留外国人向けの宗教施設にとっては、宗教自体に関わりたくない・カルト宗教であると思われる日本人が増加し、偏見の目で見られることを避けたいと考えられる。

今の状況では、宗教コミュニティと地域コミュニティの差を小さくすることが難しく、特に在留外国人が建てた新しい宗教施設によってできる宗教コミュニティが地域コミュニティに受け入れられるのには、福岡マスジッドのように長時間を要する場合も考えられる。そのため、宗教者が地域に溶けこむための努力がもっと必要と言える。

3.3 宗教施設が地域のコミュニティに求められるものとは

それでは、コンビニ全体の数よりも多く、各地域コミュニティに必ず1つは存在すると考えられる宗教施設にとって必要とされる役割とは何であろうか？

コミュニティデザイナーの山崎亮さんは、浄土真宗大谷派や日蓮宗に講師として招かれたことがある。私は、2014年5月21日に大谷大学 講堂において開かれたシンポジウム「これ

からの寺院の可能性—コミュニティデザインの視点から—」に参加した。基調講演講師とシンポジストでもあった山崎さんは、お寺は地域のコンビニであるべきだ。お坊さんは地域にもっと飛び込んでいかなければならないという主張を述べていた。

またこれから宗教者に求められる事は、ソーシャル・キャピタルとしての役割を担う事であると桜井信義などの研究者が提唱している。ソーシャル・キャピタルとは、社会・地域における人々の信頼関係や結びつきを表す概念である。これは既に多くの宗教者が取り組んでいる活動も当てはまる。例を挙げると、カトリックキリスト教会や信者などで成立したある会の会では滞日アジア労働者の支援を行っている（田中 1995:250）。全国曹洞宗青年会による東日本大震災の被災者が住む仮設住宅を訪れる傾聴活動、浄土宗の僧侶・檀家によるホームレス支援を行っているひとさじの会、浄土真宗大谷派名古屋支部による朝市、NPO 法人ちんじゅの森による自然環境を守るプロジェクトなどがある。

各宗教は上に挙げたように様々な取り組みをしている。その目的は海外支援や震災復興支援も一部含まれるが、子供やホームレスのサポートといった地域に必要なものが多い。しかし、地域コミュニティにおいては、様々な宗教を信仰する、あるいは無宗教の人達も存在する。そのため、既存の檀家制度を元にした活動のみでは、地域コミュニティの中にいる他宗教の人の支援はできない。また、各宗教の活動においては、信者以外の人への参加協力が得られにくいことも多い。事実、宗教が元になって設立した NPO 法人は宗教に関する名前を取り外しているものもある。もし、地域にある宗教施設や地域間で活動する様々な NGO・NPO 法人が一丸となって地域の課題に立ち向かえば、宗教間の壁を無くしてのサポートが可能となり、在留外国人の抱える問題を和らげることにもつながるであろう。

そのため、これからの宗教者には自分の宗教の教えを研究するミクロの視点だけでなく、宗教全体を見渡すマクロの視点が求められる。今後の発展性として期待されるのは、日本における既存宗教と移民が信仰している宗教との宗教間対話の浸透である。

カトリックの最高指導者であるフランシスコ法王は、平和のための宗教間対話の重要性を訴え¹⁴、トルコのイスタンブールにある通称「ブルー・モスク」と呼ばれるスルタンアフメット・モスクにて、『しきたりに従ってモスクの入り口で靴を脱ぎ、イスラーム教の聖地メッカの方角を向き、頭を垂れて約 2 分間、神への崇敬の黙想（バチカン報道官）をした。』¹⁵ という事実がある。

また、宗教系大学でも、キリスト系の西南学院大学では、創立 100 周年記念 学術シンポジウム「一神教は危険か？—宗教間対話の可能性—」、仏教系の東洋大学でも「宗教間の共生は可能か」といったシンポジウムが開催されている。さらに、名古屋モスクに見学に来た人のリストからは、キリスト教系の金城学院大学、神学系の國學院大学、仏教系の愛知学院大学などが、教授と学生で見学に訪れており、他宗教のことを学びに来ている様子がうかがえる¹⁶。

¹⁴ 時事ドットコム『ローマ法王、トルコ訪問＝「イスラム国」念頭、宗教対話訴え』

2014 年 12 月 29 日最終アクセス <http://www.jiji.com/jc/zc?k=201411/2014112800474&g=int>

¹⁵ 毎日新聞「ローマ法王：モスクでイスラム教指導者と無言の祈り」2014 年 12 月 29 日最終アクセス <http://mainichi.jp/select/news/20141130k0000m030087000c.html>

¹⁶ 名古屋モスク「見学・訪問をご希望の方へ」2014 年 12 月 29 日最終アクセス <http://nagoyamosque.com/readme/visit>

そして、昨年には京都マラソンに合わせて Interfarth という『異なる宗教者（例：仏教・神道・キリスト教・イスラーム教等）で4人1チームをつくり、世界平和を願うタスキをつなぎながらゴールを目指す駅伝¹⁷』を行い、MBS 毎日放送や KBS 京都などのメディアでも取り上げられている。

“Think globally, Act locally” という言葉があるが、このようなイベントを通じて各宗教者が得た思いを実践できるのは、各地域である。ただ今回の現地調査でもハードルが高い実践であると感じたし、宗教や宗派によっては教えに反するという事で協力できないという意見、あるいは予測できない様々な問題が出てくると考えられる。しかし、地域にある宗教施設が目的を共有できることで、地域住民が持つ今ある宗教に対しての様々な偏見の軽減が期待されるとともに、各宗教のソーシャル・キャピタル機能を高め、地域にある宗教施設の宗教者と NPO などの支援団体、そして住民との結びつきがうまれてくるであろう。その中で地域のことについてより話し合う仕組みが生まれてくると考えられる。これは、カルト宗教は怖い、宗教的に寛容力がある日本人だからできることでもある。いずれにせよ、地域に求められるのは伝道者でなく、1人の人間である。

終章

今回のテーマ、アジア系移民における宗教施設では、建設時や活動面で地域住民との交流が図ることが難しい事例も存在している。人口減少・少子高齢化の時代の中で、在日外国人は今後も増え続け、日本人向けではない宗教施設が今後必要とされていくだろう。その中で、異文化理解の視点の活用、地域住民に受け入れられる宗教施設が受け入れられる方法、また既存の宗教施設にできるサポート等を考えてみるために、今回この論文を執筆した。日本人の宗教離れが進む中、日本にある既存の宗教施設も同じ地域にある他宗教のことを他人事ではなく、地域の仲間として助け合って共同作業をやっていける日が来たらいいなと考える。ここで私の考える宗教施設の今後の理想と課題を列挙する。

理想

外国人のコミュニティの一部として、宗教施設を迎えられる地域社会を形成する必要がある。その発展性として、宗教的に柔軟性ある多くの日本人にとって、他国の宗教施設が地域における海外文化交流拠点、また訪問者における宗教者との宗教間対話（宗教の異文化理解）を通して、人生の生き方の考えを深められる場所であることが望ましい。

課題

個人にとっては、信仰の自由による安易な改宗の可能性や、カルト宗教と出会ってしまう可能性があるため、海外の宗教と深く接する場合は、自分に迷ってしまわないためにも、自分の考えをしっかりと持つことが必要である。

既存宗教団体にとっては、国内で外資系企業が発達すると日系企業が食われてしまうよう

¹⁷ InterFaith 駅伝 | InterFaith 日本プログラム 2014 年 12 月 29 日最終アクセス
<http://interfaith-japan.com/relay/>

に、改宗する人が多く出たら経営を圧迫する可能性もあるが、同じコミュニティで、その宗教施設と支えあい共存（Win-Win）ができる方向を目指せるか。そのためには、宗教者はそれぞれの布教を最小限に抑え地域活動をするべきである。

宗教に関しては、行政の介入が憲法で禁止されているので、いわゆるまちづくりに宗教施設や活動を組み込むことはむずかしい。各種の助成対象ともならない。よって、行政による多文化共生政策で支援することができない在日外国人の信仰は、地域コミュニティや地域にある宗教施設がもっと支えていくべきである。

論文を書き終えて

私の実家は曹洞宗のお寺であり、卒業後は大本山 永平寺での修行が控えています。奈良県立大学 地域創造学部を進学先に選んだ理由は、大学生生活において仏教以外の様々な世界に触れてみたいからであり、また地域のまちづくりに興味があったからです。私の所属した中谷哲弥先生のゼミでは、文献調査や神戸やシンガポールの訪問などを通じて異文化・多文化共生の姿と様々な価値観の存在を学びました。卒論のテーマを選択したのは、自分が僧侶となる前に様々な他の宗教施設を訪れてみたいという単純な理由が主です。しかし、日本の文化慣習に従うことが求められる在留外国人は信仰というデリケートな問題とどのように向き合っているのか、また私達はこれらの施設とどのように接していけばよいのかを問いたかったからでもあります。卒論を執筆するにあたっては思考を廻らすことに嫌気を感じた時もありましたが、ようやく完成へと至りました。修行終了後は、仏教や私が所属する宗派の教えをもっと深め、師匠である父の仕事を受け継ぐとともに、まずは個人的に地域の活動に参加し地域の方と交流をしながら自分の住む地域の問題を把握し、他地域で頑張る他の宗教者の姿も参考にしながら、宗教者に何ができるのかを試行錯誤していきたいと思います。もちろん周辺に住む在留外国人の方とも積極的に交流をしていきたいです。

本研究に際して、様々なご指導を頂きました中谷哲弥先生をはじめ、活動や議論を共に行ったゼミの仲間、そして訪問の際に温かく迎え入れていただき、質問に丁寧に答えていただいた各宗教施設の皆様に感謝の意を表します。

参考文献

- 池上彰『池上彰の宗教がわかれば世界が分かる』文藝春秋 2011 年
 菅野覚明ほか『高等学校 新倫理 改訂版』清水書院 2006 年
 駒井洋『グローバル化時代の日本型多文化共生社会』明石書店 2006 年
 高橋典史・塚田穂高・岡本亮輔『宗教と社会のフロンティア』勁草書房 2012 年
 田中宏『在日外国人 新版一法の壁、心の壁』岩波書店 1995 年
 橋爪大三郎・島田裕巳『日本人は宗教と戦争をどう考えるか』朝日新聞社 2002 年
 樋口裕二「埋葬状況からみた在日ムスリムコミュニティ」『常民文化』第 28 号、43-69 頁
 三木英『宗教集団の社会学』北海道大学出版会 2014 年
 三木英・櫻井義秀『日本に生きる移民たちの宗教生活』ミネルヴァ書房 2012 年